

### 東南アジア・エクスプレス

関西帰国生親の会かけはし

山本智子

Tomoko Yamamoto

#### 毎日が発見、初めての海外生活

##### ジャカルタ

夫の海外転勤が決まったのは、娘が小学校に入学する少し前だったと記憶している。赴任先はインドネシアのジャカルタ。たまたま知人がその地に駐在していたこともあり、私に同行の迷いはなかった。その知人に現地の情報を教えてもらいながら準備をし、先に現地入りをして夫の後を追いかけて12月末から私たち家族の駐在生活が始まった。

娘は3学期からジャカルタ日本人学校に転入した。初日は慣れない環境で心細い思いをしたのだろうか、家に帰ってくるなり泣いてしまった。娘を抱きしめ、この時ばかりは私も泣きたくなった。だが、担任の先生が毎日細かく連絡を取ってくれ、大変心強く感じた。同じアパートメントに同学年の友人ができたこともあってか、娘は徐々に慣れていった。娘を通じ



ナシ・ゴレンとレレ(ナマズの一種)料理の屋台。ジャカルタの道路脇ではこうした屋台があちこちで見られる。



ジャカルタ日本人学校の小学部・中学部合同の体育祭。チームごとに看板を作り、暑い中がんばった。

て私にも友人ができ、生活のことをいろいろと教えてもらい本当にありがたかった。

生まれて初めて住み込みのメイドを雇い、掃除や洗濯、アイロンや留守番等々をお願いした。ところが、言語も習慣も異なる上、「家の中に常に他人がいる」というある種の緊張感が生じていたこともあり、軌道に乗るまでには時間がかかった。スーパーに行けば、見たことのない野菜や果物、日用品があり、心はずんだ。「今日はインドネシア語が通じたよ!」「午後はものすごいスコールだったね」等々、日本ではほぼ気にもとめないような些細な出来事が家族の話題となり、毎日が発見だった。

#### 空の広さよ……開放感と充実感

##### シンガポール

ジャカルタ生活に慣れてきた約1年半後、娘が小学校3年生の夏休み前に、シンガポールへ転居した。シンガポール! 私にとって、そこは自由の国だった。インドネシアではどこへ行くにも、移動手段は運転手付きの車だった。これを話すとうらやましく思われる方も多いが、治安という面から考えると他に方法がなく、行動が比較的制限される生活だった。しかし、シンガポールではバス、電車、タクシー、徒歩と、日本と同様、好きなように動き回ることができる。引越しの翌日、娘と2人でコンドミニウム(マンション)の外に一歩踏み出し、歩き回ったあの開放感は忘れられない。